定年帰農でイチジク栽培にチャレンジ
～地域の担い手として農地を守る～

田原市　中神英樹氏
果樹（イチジク、甘夏ミカン）

【平成 28 年３月 22 日掲載】

定年退職を機に地元に帰って就農し、イチジク栽培に挑戦している田原市の中神英樹さんをご紹介します。

定年退職後の就農を決断

中神英樹さん

「実家の農地をどうするべきか？」。会社に勤務していた中神英樹さんは、60 歳の定年を間近に控えて悩んだ末に、「地元に帰って就農する。」という決断を下します。

それからは、就農に向けて 59 歳で県立農業大学校のトラクタ研修を受講して免許を取得するとともに、田原市主催の農業塾「チャレンジ農業セミナー」に参加して農業の基礎を学びました。

そして、平成 21 年に定年退職し、直ちに県立農業大学校の雇用創出農業研修を受講しました。約９か月間のこの研修が、新たなチャレンジのきっかけとなりました。

イチジク栽培にチャレンジ

実家は甘夏ミカン 1.2ha と茶 30a を栽培する農家でしたが、農業は収入が不安定というイメージがあったことから会社員の道を選び、旅行会社に就職しました。平成６年に父親が亡くなると、母親だけでは労力が不足し、中神さんが休日を利用して手伝いをしていましたが、管理が追いつかず、次第に園地が荒れていきました。

「実家の農地のことは、いつも頭の片隅から離れなかった。近所に迷惑をかけないように、農地を守らなければ。」という気持ちが徐々に高まっていきました。

そうした中、雇用創出農業研修でイチジク栽培に出会います。それまでは、就農後の品目さえ決まっていなかったのですが、「イチジクは投資が少なくて済み、結果樹齢に達する年数も短く、定年帰農者でも取り組みやすい。」と研修の講師が熱心に薦めてくれたことから、イチジク栽培を決断しました。折しも、実家の茶園が抜根・整地されていたこと、甘夏ミカンの管理との作業分散が可能なことから、研修終了後の平成 22 年５月に思い切って 30a の茶園跡地全面にイチジクを新植しました。中神さんのチャレンジの始まりです。

イチジクほ場

周囲の仲間たちに支えられて

ところが、実際に栽培を始めてみると、想像以上に大変でした。イチジクの栽培技術を少しでも早く習得しようと、田原市内を始め各地のイチジク農家に出向いては技術を吸収する日々が続きました。

最初の頃は果実の品質が悪くて、返品ばかりでした。それでも気を落とさず、日々栽培に励みます。その甲斐あって、イチジクの収量と品質は、年々確実に向上してきました。

また、ＪＡ愛知みなみで構築されているイチジクのバラ受け共選体制が、中神さんの生産性の向上に役立っています。露地イチジクの管理可能面積は１人で 15ａ程とされていますが、当産地では朝収穫したイチジクをそのまま選果場に運べばよいので、選別・箱詰めの労力を栽培管理に回すことができるのです。「それでも８月下旬～９月上旬の収穫ピーク時には、朝５時から収穫を始めても、選果場への搬入時間に間に合わないほど。最初は就農に反対していた妻も、イチジクの収穫期間中には手伝ってくれるんですよ。」と話してくださいました。

中神さんが頑張れるのは、周囲の仲間たちの存在のおかげです。帰農と同時にＪＡの生産部会や地域の老人会に加入したところ、「年代の近い仲間が多くて、とてもスムーズに入っていくことができた。わからないことや困ったことは何でも相談し、ずいぶん助けられた。イチジクほ場の支柱（パイプ）や防風ネットは要らなくなった人から譲り受けたものでまかなうことができたし、放任だった甘夏ミカンの樹も近所の人にせん定してもらい売れるものができるようになった。」と話してくださいました。周囲の仲間たちと親睦を深め、情報交換やコミュニケーションに努めたことが、これまでの中神さんを支えてきました。

防風ネット

定年帰農のモデルを目指して

中神さんに定年帰農に対する今の気持ちを伺ったところ、「後悔はしていない。やりがいを持って、農地を守っていくことができている。定年したら毎日が日曜日なんていう生活は嫌。自分のような定年帰農者が一人でも増えるように、モデルになれたらいいですね。」と話してくださいました。

最後に、今後の展望を伺うと、「これからも健康で、少しでも長く農地を守っていきたい。また、イチジクの栽培技術をもっと向上させたいし、手間がないので省力技術も積極的に取り入れていきたい。」と前向きな言葉で締めくくっていただきました。

執　　筆：農業経営課
取材協力：東三河農林水産事務所田原農業改良普及課

Copyright (C) 2016, Aichi Prefecture. All Rights Reserved.